

『国際政治』198号 『ウィルソン主義』の100年（仮題）

『国際政治』198号では、「『ウィルソン主義』の100年」というテーマのもと、ウィルソン大統領の外交とその影響について多面的に検討したい。刊行予定の2019年がパリ講和会議から100年の節目にあたるだけでなく、国際秩序が大きく揺らぐ現在、歴史をさかのぼり、国際関係を律する規範の転換を掲げたウィルソン外交の遺産を考察することに今日的な意義があると考えからである。

アプローチは多々考えられるが、ここでは例として三つの問いをあげたい。第一は、そもそも「ウィルソン主義」とは何かというものである。それは、リベラルで民主主義的な世界秩序の構想だったのか。それとも、その主眼は反ボルシェヴィズムにあり、資本主義の維持が最優先課題だったのか。ラテンアメリカ諸国への軍事介入など、国際主義や民主主義と相容れない側面があったことをどう解釈するか。ウィルソンの人種差別主義は彼の外交にどのような影響を与えたのか。先行研究は多いが、ウィルソン外交の本質をあらためて問う論考は欠かせない。

第二は、「ウィルソン主義」がこの一世紀間の国際関係の理念や規範にどのような影響を及ぼしたかである。国際主義、道義主義、理想主義など、ウィルソン外交と結びつけられる言葉は多いが、それが国際社会の実践的課題にどう反映されたかをめぐってはさまざまな具体的検証が可能であろう。平和維持や平和構築、人道的介入といった概念は、「ウィルソン主義」をいかに継承し、また継承しなかったのか。米国を中心として、冷戦終焉をウィルソン主義の勝利と解釈する傾向があったが、この解釈自体は21世紀の国際秩序にどのような影響を与えたのかなど問われるべき課題は多い。

第三は、「ウィルソン主義」の下での先進国と途上国や植民地との関係をめぐる問いである。ウィルソンの掲げた「自己統治」と、被支配民族や植民地の唱えた「民族自決」とはどう共鳴し、せめぎ合ったのか。その緊張関係は、途上国側の民主主義の発展にいかに作用したのか。「近代化論」や多様な「帝国」論と「ウィルソン主義」との関連を探ることから、グローバリゼーションの中の地域間関係やグローバル・ヒストリーの叙述のあり方を再検討することも可能であろう。

「ウィルソン主義」を幅広く捉え、多様なアプローチ（歴史、国際関係理論、政治思想、国際法、地域研究など）からその今日的意味を問う論考を期待したい。

論文の執筆を希望される会員は、論文の仮タイトルと趣旨（600字～800字程度）を下記の編集責任者の連絡先までお送りください。（締切りは2018年8月31日）。応募にあたっては、ご自宅とご勤務先・ご所属先の住所・電話/FAX番号、メールアドレスをお知らせください。検討のうえ、ご執筆願うことになった方には2018年9月30日までに編集責任者から連絡いたします。論文原稿の最終締め切りは2019年2月28日を予定しております。論文原稿の分量は註を含めて2万字以内です。査読のうえ、最終的な掲載の可否を決定いたします。本号の刊行は2019年8月31日を予定しています。

執筆要領については、以下の学会ホームページをご参照ください。

<http://jair.or.jp/wordpress/wp-content/uploads/documents/shippitsuyoryo.pdf>

なお、お問い合わせ、お申し込みは下記までお願いいたします。

<編集責任者> 西崎文子

<連絡先> 〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

東京大学大学院総合文化研究科

アメリカ太平洋地域研究センター

Tel/Fax 03-5454-6323

Email nishizak★ask.c.u-tokyo.ac.jp (★を@に置き換えてください)